

日本におけるゴンチャロフの受容について

——翻訳・研究史概観——

沢 田 和 彦

はじめに

ゴンチャロフという名を耳にする時、ある人は怠惰なオブローモフを想起し、またある人は二葉亭四迷に影響を及ぼしたロシア作家を思い浮かべるだろう。また、幕末の長崎を訪れて日本並びに日本人を生けるが如く描き出した旅行者を挙げる人もいよう。シカゴ大学のロシア文学研究者M. エーア (Ehre) によると、あるアメリカの喜劇役者はオブローモフの名を挙げて話相手がゴンチャロフと答えるか否かでその知的レベルを推し量ると言い、また英国学士院の文学関係の著名な会員の一人は、ゴンチャロフが『オブローモフ』を書いたのか、オブローモフが『ゴンチャロフ』を書いたのか、永年記憶することができなかつたと漏らしたという⁽¹⁾。ゴンチャロフが我国の文学と社会生活に及ぼした影響力は、米英の如き低次元にとどまるものではなく、日本におけるゴンチャロフ受容の歴史を振り返ることは、決して無意味なことではないと筆者は考える。

このテーマは大別して次の三点に要約することができる。

1. ゴンチャロフの作品の翻訳並びに研究（紹介）史。
2. ゴンチャロフと二葉亭の関連、及びこれに関する研究史。
3. 『フリゲート艦パルラダ号』（1858）の日本関係の個所が明治以来繰り返して邦訳され、日露交渉史の貴重な史料となってきたこと。

紙幅の都合上、ここでは第一点に限定して論ずることとする⁽²⁾。

1

筆者の知る限り、ゴンチャロフ（イヴァン・アレクサンドロヴィチ、1812—91）を最初に邦訳したのは二葉亭四迷である。翻訳は二種類あるが、厳密に言っていずれが先になされたかは不明である。

一つは『オブローモフ』（1859）の部分訳である。これは同小説第一編第九章の「オブローモフの夢」の一部を訳出したもので、「おひたち」という表題

で訳者の死後『文章世界』大正2年3月号に掲載された。訳文に先立つ記者の付記によると、二葉亭が訳しかけてそのまま公刊しなかった草稿が森田思軒の遺族の許で発見されたという。執筆時期は「あひゞき」を公けにした頃というから、明治21年7-8月頃のこととなろうか。岩波版九巻本『二葉亭四迷全集』第四巻解説には、明治21、2年頃かとある。いずれにしろ明治21、2年と言えは1888、9年、即ちゴンチャロフがまだ存命中のことであって、この点でも二葉亭がロシア文学紹介の上で果たした先駆的役割がうかがえる。「おひたち」は未定稿という⁽³⁾。それは二葉亭の前書きに、オブローモフがシュトリツに自己の生活の理想を語る場面を次に訳してみせようとするにもかかわらず、それが果されなかったことから知られる。固有名詞の表記や解釈に一、二誤りがある⁽⁴⁾とはいえ、全体として正確な、口語体の翻訳である。

もう一つは手記「くち葉集ひとかごめ」中の『断崖』(1869)の部分訳である。それは「崩れ岸二冊目第一章反訳」と題された個所で、第三編第一章冒頭を文語調で訳したものである。ここでは主人公ラーイスキイの、自由主義漸進論者としての世界観が述べられている。同じく「くち葉集ひとかごめ」の次の個所も、重松泰雄氏の指摘の如く⁽⁵⁾、『断崖』からの試訳である。

「さるにても信子は如何にしたりけん、今はかしこに霞む村の中にをるならん、ア、薄情なり、木強なり、かくまでに思ふ我を棄て、そゝろあるきをするとは如何に、否々さいふは我か僻言なり、落花心有れとも流水情なし、我より心をくり糸のかたおもひなればその筈なり、それをうらむは道理にあらず、恨むまし恨むへからすと心のうちに思ひつゝ尙ほたゝつみて悄然たり、

徠子期(徽)は斷岸の上に膝くつれきしに顚をのせてかしらを抱えて坐したるまゝ死したる人の如くにて一ト時はかりを過したり、満身總て失望となりたり、信子のためその身のためにいふにいはいはれぬくるしみを耐え忍ひたるも今はしも水の泡となりたりしや、

兩人のものは共にその敵のまさしきを知れり、されとも心の中にては愚かにも、馬克は信子の折れんことを望み信子は馬生の譲らんことを望めり⁽⁶⁾、」それぞれ第四編第八章、第十三章冒頭、第十二章から部分訳を行なったものである。但し第一の訳は意識である。また「信子の今の心状は、人の一生のうちにて至て困難なる時なるは問はても知るき事ながら、如何やうに困難なるやは、問へといはねばさらにわからず、頼也さらに望むことなし、…」に始まる個所⁽⁷⁾も、重松氏によると、『断崖』第三編後半か第四編前半に依拠しているという。ラーイスキイを「頼也」、徠子徽(期)、ヴェーラを「信子」、マルク

を「馬克」,「馬生」としたところなど、いかにも二葉亭らしいと言えよう。ただこのあたりは厳密に言って、半ば翻訳,半ば二葉亭自身の創作でもある。「くち葉集ひとかごめ」の序に「明治二一年八月七日也」とあるので、これらの試訳は同年8—9月になされたということになるろう。

2

周知の如く、ゴンチャロフはプチャーチン提督の秘書官として1853—54年（嘉永6年—安政元年）長崎に来航し、その名は川路聖謨の『長崎日記』や古賀謹一郎の『西使日記』,その他の古文書に書き留められている⁽⁸⁾が、これを除けば彼の名が最初に言及されるのは、管見によれば、明治22年のことである。同年4月22日発行の『国民之友』所載の論文「言論の不自由と文学の発達」の中で、ゴンチャロフはトルストイ,ツルゲーネフと共に「奇特絶偉なる小説家⁽⁹⁾」と評されている。

明治26年、桑原謙蔵は「露西亜最近文学の評論」を5回に亘って『早稲田文学』に連載し、ゴンチャロフ,トルストイ,トルストイの作中人物の問題,ドストエフスキイ,ツルゲーネフについて論じた⁽¹⁰⁾。今日においてもまとまったゴンチャロフ論の数は些細なものであるのに、この時点でこのような論文が執筆されたことに驚嘆せざるをえない。桑原は前置きで、本論文はチュイコの説に基き諸大家や自分の意見をも交えたものだとは断わっているが、この「チュイコの説」とは、出典は記されていないが、明らかに次の論文のことである。

Чуйко В. В. Русский роман и его значение (Окончание).—Новь, СПб., 1885, т. 2, № 8, с. 642—651 (ゴンチャロフについては с. 643—645).

しかも第一,三,四回はほぼ全面的にこの論文に依拠している。以下、そのゴンチャロフ論を原文を補いつつ略述する。

まず桑原によると、ゴンチャロフの第一の特徴は「観察力の宏大無邊」なところであり、その作品には「哲學上の理論に基きて人生を保合組成し全編を一貫して普通譬喩的の觀念の運行せる」(“...философский синтез жизни, который в искусстве очень часто переходит в простую аллегоричность.”⁽¹¹⁾)性質がある。桑原は『平凡物語』(1847)の主人公とその叔父を評して「決して斯くの如く整成し斯くの如く一方に偏執せる状態は此社界に生存する事なし」と述べ、この二人は「人間の性質の模範或は通性に非ず」(“...не типы”⁽¹²⁾)としている。次いで論者は「遅まきながら」(1879)—『断崖』の不評に対しゴンチャロフがその意図と理念や、長編三部作の内的関連を説いた論文—から

『平凡物語』の甥、叔父と『断崖』の祖母について述べた個所を引用して、作者は「…哲學を規矩とせる想像力にて鍛錬せる抽象的の布延を其全小説にも其一編にも其一小段落にも應用せん」とした（“... абстрактные обобщения, очень сбивающиеся на философскую мечтательность, он стремился представить и во всех своих романах, в общем и в частности.”⁽¹³⁾）と書いている。桑原によれば、「…ゴンチャロフは…人生の一模型を彫製し」（“... Гончаров приходит ... к символизации.”）ようとしたのであり、その創作方法は「模型主義譬喩主義」（“символизация и аллегория”⁽¹⁴⁾）と要約されている。

この論文は難解で、チュイコの原文を参照せずには論旨の把握は殆んど不可能と言ってよい。術語^{テルミン}の訳語に問題があり、また誤訳個所が少なからず存在する。中には直接論旨に関わる個所もあった。例えば、“непосредственное наблюдение”は「間接の観察力」，“Это—та же Ольга, только шестидесяти годов.”は「是れオリガと全く同質同性の人物にして只六十年の星霜の経過せしより」と訳されており，“вместо живого образа”に至っては“вместе”と混同して「次第に其形状の活氣を増すと共に⁽¹⁵⁾」となっている。また上述の如くこの評論はゴンチャロフの創作方法を批判的に検討し、その形象の典型性を否定するという、一般的なゴンチャロフ観とは逆の趣旨のものであるから、この見解に異議を唱える人も少なくないであろう。

私見によれば、この論文の最大の価値は「遅まきながら」から引用がなされている点にある。それは、例えば、三部作は一時代から次の時代への移行期のそれぞれ三局面を描いたもので、『平凡物語』はその第一の時期、『オブローモフ』は第二の＜眠り＞の時期、『断崖』は第三の＜覚醒＞の時期を表現したものであること、或いは三部作のヒロイン、ナーヂェンカ、オリガ、ヴェーラは言わば同一人物であって、その行動の差異は各人が属する時代そのものの差異であるということ、などの指摘である。

3

明治時代ゴンチャロフ受容の点で、二葉亭に勝るとも劣らぬ役割を果たしたのが嵯峨の屋おむろ（本名矢崎鎮四郎）である。

嵯峨の屋が探美生という筆名で明治27年「オブローモフの夢」の部分訳を発表した⁽¹⁶⁾ことはあまり知られていない。発表年では、これが『オブローモフ』の最初の邦訳ということになる。翻訳部分は二葉亭の「おひたち」と重複し、

長さはその半分以下，途中一個所省略がある。「です」，「ます」調の平易な文体で，読みやすい訳文となっている。訳者はその前書きで「文章軌範」より訳したと書いているが，これは当時「フィローノフ氏露国文章軌範」と呼ばれた下記アンソロジーのことと筆者は考える。

Филонов А. (сост.) Русская хрестоматия с примечаниями. Для высших классов средних учебных заведений. ч. 1. Изд. 5-е. СПб., Глазунов, 1875.

その論拠としては次の三点を挙げたい。

1. 矢崎鎮四郎在学当時の東京外国語学校の図書館にこのアンソロジーが所蔵されていて，露語科第四，五学年の「文法」，「修辞」，「文学史」の時間の教科書として使用されていたこと⁽¹⁷⁾。
2. 明治21年3・4月(?)と22年冬頃，二葉亭が嵯峨の屋に宛てた二通の書簡にそれぞれ「兼而恩借致居候露國文章軌範中より『學術と美術との差別』と題する論文を國民之友投書可致積にて既に翻譯仕り候ゆえ…」，「恩借の貴稿吝嗇家之肚露國文章軌範并に十全法話ハ與に桑原方まで差出置候間…⁽¹⁸⁾」とあり，この時期二葉亭が嵯峨の屋からこのアンソロジーを借用していたこと⁽¹⁹⁾，つまり嵯峨の屋がこのアンソロジーを所有していたことが分る。但し，それが元来嵯峨の屋の所有になるものか，或いは彼は明治19年頃，東京商業学校（外国語学校を改廃統合）の書籍室に矢野校長の許可を得て出入りしていた⁽²⁰⁾というから，その折り持ち出したものかは定かでない。

3. 嵯峨の屋訳に該当する個所がこのアンソロジーに含まれていること。

「オブロウモフの幼時」は翌28年加筆訂正されて『家庭雑誌』に掲載された。訂正は二段組み5頁で約30個所に上る。句読点，てにをは，漢字の変更等が大部分を占めるが，よりこなれた明確な訳語に改められた個所もある。一例のみ挙げると，

「家根の中央を板葺にした所の朽て，やさしさうな青苔の生て居る，」(初訳)

「家根の中央を板葺にしたのが朽て，柔かさうな青苔の生て居る，」(改訳)

(“...с севшей на середине деревянной кровлей, на которой рос нежный зеленый мох, ...”)

また初訳で「もう稻小屋の方へ飛んで往ますよ」，「いたづら計しては居ませんよ。」等と「よ」が多用されていたのに対し，改訳の方ではこれが一部取り除かれて読みやすくなっている。後者は嵯峨の屋の第二創作集『文の庫』(明

29) に収められた。

4

明治30年『新小説』に発表された嵯峨の屋の『通例人の一生』は、草野柴二「十九世紀露西亜文学概観」の指摘²⁴⁾の如く、『平凡物語』の翻案小説である。最初にこの小説の梗概を述べておこう。

『通例人の一生』の主人公は、信州諏訪の近在に住む豪農の一人息子田村義明である。『平凡物語』のアレクサンドル同様、彼は下男下女に取り巻かれ母に慈しまれて「お坊様」に育った。成人後は「文学」に打ち込み、地方新聞に詩を投書して得意満面になっていた。24歳の時、義明は学問を修め大詩人にならんとして上京を決意する。その東京には叔父の田村武左衛門がいた。これはピョートル叔父と同じく若い頃故郷を飛出して無一文から財産を築き上げ、今では築地に大製造場を経営する人物である。彼は主人公とは対照的に現実的、散文的な人間として描かれており、詩人志望の義明に対して金儲けの意義を説き、「生きた事業」をしろと勧める。『平凡物語』同様、ここから甥と叔父の衝突、そして甥の幻滅のパターンが始まる訳である。義明は詩人の望みを断たれ、やむなく叔父の会社に勤め始めた。アレクサンドルがナーヂェンカに熱中した如く、義明は新橋の芸者小志んに熱を上げるが、やがて騙されていたことに気づく。つくづく東京が厭になった主人公は故郷に帰って行くが、そこでも彼の醜態は続き、心配した肉親は彼に妻を迎えることとした。それから5、6年後、義明が妻子を伴って上京し、年取った叔父夫婦と再会して昔話に移す場面で物語は終る。

以上より明らかに『通例人の一生』は『平凡物語』の翻案である。もちろん両作品の相異点も少なからず存在する。例えば、女性解放問題を体現するナーヂェンカに比して、小志んが主人公を惑わす芸者以上の何者でもないこと、アレクサンドルと違って義明は最終的に叔父の道を歩まなかったこと等、枚挙にいとまがない。もう一つ異なる点は、アレクサンドルの場合と違って、第一回で義明の「幼時の家庭と教育」が詳細に描き出されていることである。そして注目すべきことに、この第一回は明らかに「オブローモフの夢」の情景を明治の日本に移し換えたものなのである。嵯峨の屋自身訳出した個所を含めて、オブローモフカの朝、両親の監督ぶり、食事の問題、全員一斉の昼寝、主人公の腕白ぶり、夕べの場面が置き換えられている。そして小学校、尋常中学校での義明の我儘ぶりと県内の塾に入ったいきさつが「夢」を踏まえて語られる。一

例のみ挙げると次の通りである。

「…此時このとき乳母うばは最前さいぜんから此兒このこの目めを覺さめるを待まつて居ゐたといふ風ふうで、おやお目々め々が覺さました歟やと言いふを序ちよびら開ききに、種々さまざまの甘あまやかしを雨あめの如ごとくふりかけ、さもいと惜おしげ氣だきに抱だき起おこして、抱だきしめて、頬ほ附つけをして、やがて衣服いふくを着きせ替かえて、貌かほを洗あらはせて、頭髪かみをかいてやる、其それを小兒こどもはうるさまうに待遠まちどほがりながら、濟すむや否いなや直すぐ飛とんで父母ふぼの元もとへゆき、…²²⁾」(『通例人の一生』)

「乳母うばはもう疾とうから此子このこの目めを覺さすのを待まつて居ゐました。其中そのうちに目めを覺さしたので、靴足袋くつたびを延のばして穿はせやうとしました。所ところがもういたづらな、足あしをばたかへとさせて居ゐて、なかつかま捕つかまへさせません。其それをやつかまつと捕つかまへましたが、顔かほを見合みあせておほおほと二人ふたりは面白おもしろさうに笑わらひました。可愛かあいらしいこと。足袋たびを穿はせ終おはると、乳母うばはやおこつとかかほへ起あり、顔かほを洗あらつたり、髪かみをかいたりしてやはつて、母はの所ところへつれてゆゆきます、…²³⁾」(『オブロウモフの幼時』)

従って厳密に言えば、『通例人の一生』は『平凡物語』と「オブローモフの夢」双方の翻案小説ということになる。この作品は二ヵ月後に逍遙、鷗外の序を得て単行本で出版されたという。

この小説発表時の反響は、しかしながら、芳しいものではなかった。次のような、当時評壇に君臨していた『めさまし草』所載「雲中語」を引用すれば充分であろう。「…嵯峨の屋の作は高足駄の如し。初は時々手柄ありしが、やがて身の丈ひくくとなりて、朴齒の下駄にも劣るやうなり、今は日光下駄にもあなどらるくやうなりしこそ悲しけれ。此篇の如きは鼻緒のゆるみたるものといふべし²⁴⁾。」

明治40年代に入ってゴンチャロフの言及数は急激に増大する。明治期における、上記以外の翻訳、主要紹介文献として、昇曙夢訳「雷雨」²⁵⁾、若杉三郎訳「熱き恋」²⁶⁾、「近代三十六文豪 ゴンチャロフ」²⁷⁾、ターナー著 永代静雄訳「ゴンチャロフの三大傑作」²⁸⁾を挙げておく。

5

大正6年、山内封介が初めて『オブローモフ』を完訳した。序は彼の師昇曙夢が書いている。これは画期的な仕事であって、例えば後に中村武羅夫と宇野浩二が、大正5年頃『オブローモフ』が大評判でオブローモフ主義が流行ったと述懐している²⁹⁾のは、この翻訳を念頭に置いたものと思われる。同訳は昭和7—8年文庫本として再刊されたが、これは殆んど根本的に改訳したものである。

山内の功績はこれにとどまらない。彼は論文「オブローモフ主義に就て⁸⁰⁾」(大6)を執筆し、また『ロシア文学史』(昭2),『世界文学講座9 露西亜文学篇』(共著,昭5)でゴンチャロフについて比較的詳細に論じている。

『ロシア文学史』の中で山内はこの作家の特徴を、「客観性が豊富なことと、観察が深刻なことと、廣い範圍に於ける典型的人物を描かうとする努力⁸¹⁾」と規定している。彼はツルゲーネフとゴンチャロフの類似点として「多くの人の共通點を捉へて、人格化された社會相を描いてゐる」点、「寫實的な極く緻密な客觀的描寫法」、「悲劇的運命的人生觀」を挙げ、逆にツルゲーネフが「往々にして客觀を無視して主觀内に駈け込むのに反し、ゴンチャロフの方はこの冷靜と緻密と客觀性とを決して描寫の上から失はない。⁸²⁾」と述べる。山内によると、ルーヂンもオブローモフも「理想に燃えながらその理想を實現する意志の力を有たない『餘り者』[“лишний человек” —引用者]の典型」であり、「理想と現實、精神と物質との間に板挟みになつてゐる人間である。⁸³⁾」このように山内の論はこの時点として高レベルのものと言えよう。

『世界文学講座9 露西亜文学篇』については、重複を避けるため一点のみ紹介すると、ゴンチャロフの特徴たる典型的人物の描写は、彼が「『綜合』[“синтез” —引用者]の才能⁸⁴⁾」にたけていたことを證するものだという指摘がある。これはこの作家の創作の本質を解明した、注目すべき発言である。何となれば、筆者もこの<統合>をゴンチャロフ文学の成否を握る鍵と考えるからであつて、この点が成功した場合には、ベリンスキイが『平凡物語』を称揚して述べた如く、「他の人なら十冊の中編小説にもなるべき事が、彼にあっては一つの額縁に納まっている。⁸⁵⁾」ということになり、逆にこれが達せられぬ時は、『断崖』の執筆の如く遅々として進まず完成まで20年を要することになる、その大きな原因の一つとなつたからである。

大正期としては他に、夏目道男訳「運命の轉變」⁸⁶⁾、菊池仁康訳「幼時のオブローモフ」⁸⁷⁾、八杉貞利訳「無限の苦惱」⁸⁸⁾等の翻訳がある⁸⁹⁾。

6

昭和に入って井上満氏がゴンチャロフの三長編小説の全訳と旅行記の部分訳、そして三論文の翻訳を成し遂げた。これはゴンチャロフ受容上、極めて有意義な仕事である。

井上訳『文芸評論集』(昭23)には「千万の苛責」^(ママ)、「ベリンスキーの人とな

りについての覚書」(1880)、「おそ蒔きながら」が収められている。「百万の苛責」はグリボエードフの『知恵の悲しみ』を論じたもので、独特のチャーツキイ、ソーフィヤ観によって、先行批評に対し立派に一家言を吐いた評論である。またベリンスキイ論は、人と物への激しい熱中や誠実で真っすぐな性格という、人間的側面からこの批評家を述懐した貴重な回想記である。他ならぬこれら三論文を選んだところに、訳者のゴンチャロフ理解の深さを読みとりたい。

井上氏は『断崖』(昭24—27)第五編末尾に30頁に及ぶ「あとがき」を付し、作者の生涯とこの作品について詳述している。管見によれば、氏にはゴンチャロフに関するまとまった研究書、研究論文はなく⁴⁰⁾、それ故解説の類に注意を払わなければならないが、この伝記はこの時点までで最も詳しく正確なものであり、『断崖』論は現在に至るまでも最も詳細を極めたものと言える。そしてこの「あとがき」は内容から見て明らかにソビエトの代表的なゴンチャロフ研究書、Цейтлин А. Г., И. А. Гончаров. М., АН СССР, 1950, 492 с. に依拠していることを指摘しておく。『平凡物語』(昭27—28)の解説も同様である。従って井上氏の今一つの功績として、当時として最新の、ソビエトの代表的研究を紹介した点を付け加えねばならない。『オブローモフ』(昭34)の解説半ばにして逝去されたのは惜しまれてあまりある。氏はこれらの訳業を全集にまとめる希望を持っていたが、それは果されずに終わった。

昭和期では他に米川正夫訳『オブローモフ』(昭22—23, 改訂版 昭51)、各文学史のゴンチャロフの項⁴¹⁾の他、木村彰一「解説 ゴンチャロフ⁴²⁾」、直野敦「ゴンチャロフの小説『断崖』とアンティ・ニヒリズム⁴³⁾」を挙げておく。

7

最後にゴンチャロフ批評の受容について触れておかねばならない。ベリンスキイ「1847年のロシア文学概観⁴⁴⁾」(1848)、ドブロリューボフ「オブローモフシチナとは何か?」(1859)、メレシュコーフスキイ『永遠の伴侶』(1897)、クロポトキン『ロシア文学の理想と現実』(1905)等がその代表的なものである。

まずドブロリューボフの論文が初めて邦訳されたのは、筆者の知る限り、明治42年馬場孤蝶が「オブロモウイズム」と題して訳出した三頁弱の断片訳⁴⁵⁾である。但しその内容は以前から紹介されていて、例えば二葉亭は前記「おひたち」の前書きでこの批評家の名を挙げ、「露西亞文学談」(明39)ではその論旨

を詳述している。この論文の完訳は、筆者の知る限り、昭和18年金子幸彦氏によるものである。

『永遠の伴侶』所収のゴンチャロフ論は、大正7年舟木重信によって全訳された⁴⁶⁾。これは *Ewige Gefährten. Übers. von A. Eliasberg.* からの重訳である。ロシア語からの翻訳は、昭和15年の中山省三郎訳まで待たねばならない。この評論の特色は、時代の交代期にはどっちつかずの、不完全な、分烈した性格が現れ、新時代に属する理性、信念と、旧時代のものたる本能、気性の闘争の犠牲者が三部作の主人公達であるという考察、或いはゴンチャロフは〈過去の詩〉を理解し、オブローモフシチナ、農奴制度と共に純潔で自由な生活を過去に於て見出したという考察にあり、ある意味でドブロリユーボフと対極をなす論と言える。

『ロシア文学の理想と現実』は大正9年馬場孤蝶、森下岩太郎、佐藤緑葉の三者によって完訳された⁴⁷⁾。クロポトキン⁴⁸⁾はオブローモフシチナの普遍性を強調し、それは両大陸及び全地球上に存在すると述べている。

メレシュコーフスキイの論は、例えば井筒俊彦『ロシア的人間』(昭28, 再版 昭53)に、またクロポトキンの論は中島孤島「オブローモフイズム⁴⁸⁾」や前記山内封介の論述中にその反映を見出すことができる。しかしながら、明治から今日に至るまでゴンチャロフ論の変遷を辿ってみると、やはりドブロリユーボフの評論が我国でも主要なゴンチャロフ観を形成してきたと言わざるをえない。その例として明治期の西海枝静「露国文学と農民(続)⁴⁹⁾」、戦後の中村融「ゴンチャロフのオブローモフ⁵⁰⁾」、近年のものとして桜木新吾「イ・ア・ゴンチャロフの『オブローモフ』について⁵¹⁾」を挙げれば充分であろう。

8

以上、ゴンチャロフ受容史を概観してきたが、この作家が我国の文学と社会生活に及ぼした影響力が、トルストイ、ドストエフスキイの比でないことは言を俟たず、また序で述べたように、本テーマは他の二点と共に総合的に考察されなければならない。従って結論を急ぐことは差し控え、今回の作業を通して筆者が感じた点を一点挙げるにとどめたい。それは、日本におけるゴンチャロフの受容が明治20年代初頭に始まり、40年代に入って隆盛を見、大正初期に一つのピークを迎えるという、ロシア文学受容の大勢にほぼ順応した形で行われたのではないか、ということである。但し、受容の初期の段階において、大陸経由の重訳よりも、むしろ主として二葉亭や嵯峨の屋という旧外語の出身

者によって、直接ロシア語からなされたという点に、筆者は一大特色を見出すものである。

資料収集に際し、檜山邦祐、久野公両氏より貴重な文献を拝借しました。

註(1) M. Ehre. *Oblomov and his creator. The life and art of Ivan Goncharov.* Princeton university press, Princeton, 1973, p. vii.

- (2) 第二点については拙稿「ゴンチャロフと二葉亭」(『比較文学年誌』17 昭56・3 早稲田大学比較文学研究室)を参照されたい。
- (3) 『二葉亭全集』第四卷「凡例」2頁 大2・7 東京朝日新聞発行所。
- (4) 「イーリヤ, イーリイチ」(九卷本『二葉亭四迷全集』第四卷 308, 309頁)は文点上から言えば「イリヤー・イリイチ」。「アンチーブ(馬の名)」(311頁)とあるは誤りで、これは下男の名。従って「…此珍しい化石を嚙砕く。」(314頁)のも「馬」ではなくこの下男である。
- (5) 「『浮雲』とゴンチャロフの諸作品」『文学論輯』5 18—21頁 昭33・3 九州大学分校内文学研究会。
- (6) 『二葉亭四迷全集』第六卷 25—26頁 昭40・2。
- (7) 前掲書 24頁。
- (8) それぞれ『大日本古文書 幕末外国関係文書附録之一』36, 42, 55, 64頁, 244—245頁 大2・2 東京帝国大学文科大学史料編纂掛, 『幕末外国関係文書之三』317, 320, 332, 545—546, 549—550, 554—556, 558, 560, 563頁 明44・7, 『幕末外国関係文書之四』58頁 明45・2。
- (9) 『国民之友』4—48 4頁 民友社。
- (10) 柳富子「『早稲田文学』とロシア文学—ロシア文学移入研究ノート—」(『比較文学年誌』6 昭45・3)参照のこと。
- (11) それぞれ『早稲田文学』1—31 2頁 明26・1 東京専門学校; 前掲チュイコの論文 c. 643.
- (12) 前掲桑原論文 4頁; там же, с. 643.
- (13) 前掲論文 6頁; там же, с. 644.
- (14) 前掲論文 8, 9頁; там же, с. 645.
- (15) Там же, с. 643, 645; 前掲論文 2, 7—8頁。傍点は引用者。
- (16) 「オブロウモフの幼時」『しからみ草紙』55 1—6頁 明27・4 しからみ社。
- (17) 北岡誠司「『小説総論』材源考—二葉亭とベリンスキー—」『日本文学研究資料叢書 坪内逍遙・二葉亭四迷』所収 174頁 昭54・8 有精堂。
- (18) 『二葉亭四迷全集』第七卷 163, 391頁 昭40・3。
- (19) 杉崎俊夫「嵯峨の屋おむろ序説」(『日本文学論考』所収 昭45・12 桜楓社)の註4参照。

- (20) 嵯峨の屋おむろ「文学者としての前半生」『明治文学全集17 二葉亭四迷・嵯峨の屋おむろ集』所収 372頁 昭46・11 筑摩書房。
- (21) 『文章世界』3—6臨時増刊 226頁 明41・5 博文館。
- (22) 『新小説』2—8 4頁 明30・7 春陽堂。
- (23) 『文の庫』113頁 明29・10 春陽堂。
- (24) 『めさまし草』21 14—15頁 明30・9 めさまし社。
- (25) 『使命』37 15—17頁 明35・1 使命社。
- (26) 『近代文学訳註叢書』第一編 13—39頁 明42・7 新潮社。英語版アンソロジーより『平凡物語』第二編第三章を部分訳したもの。
- (27) 『文章世界』3—6臨時増刊 11—17頁 明41・5。数多くの誤りがある。
- (28) 『早稲田文学』2—42 53—60頁 明42・5 早稲田文学社。原典は Turner C. E. The modern novelists of Russia. Oxford. London, Trübner and Co, 1890.
- (29) 対談「ロシア文学と日本文壇との関係」『新潮』32—9 175頁 昭10・9 新潮社。
- (30) 『新潮』26—3 122—125頁 大6・3。
- (31) 『ロシア文学史』126頁 昭2・1 金星堂。
- (32) 前掲書 132—133頁。
- (33) 前掲書 136, 138頁。
- (34) 『世界文学講座9 露西亜文学篇』355頁 昭5・4 新潮社。
- (35) 「遅まきながら」より引用。И. А. Гончаров, Собр. соч. в восьми томах, М., Гослитиздат, т. VIII, с. 80, 1955.
- (36) 『露西亜評論』2—4 153—167頁 大8・4 進文館。原題“Превратность судьбы”(1892), ゴンチャロフの絶筆である。
- (37) 『露西亜二十一人集』231—242頁 大11・1 善文社。
- (38) 『ロシア文学』20 2—6頁 大13・7 三田書房。未完。原題“Милльон терзаний”。(1872)。
- (39) 他に相馬泰三訳『オブローモフ』, 梅田寛訳『旧時代の下僕達』があるというが、筆者未見。
- (40) 『折峨 井上満 遺稿と追想』(昭38・5 井上満遺稿集・追悼録刊行委員会)の「ゴンチャロフ研究」は各翻訳の解説をまとめたもの。近しい人々による氏の追想は筆者にとって貴重だった。
- (41) 例えば, 尾瀬敬止『ロシア文学史』118—128頁 昭22・12 日本科学社, 昇曙夢『ロシア・ソヴェト文学史』192—204頁 昭30・9 河出書房(復刻版 昭51・2 恒文社), スローニム著 神西清・池田健太郎訳『ロシア文学史』177—187頁 昭32・10 新潮社(改訂版 昭51・5), 木村彰一編『ロシア・ソビエト文学』184—195頁 昭36・7 毎日新聞社, 岡沢秀虎『ロシア十九世紀文学史』上巻 505—510頁 昭46・9, 下巻 156—173頁 昭51・3 早稲田大学出版部。
- (42) 『世界文学大系30 ゴンチャロフ・レスコフ』472—476頁 昭34・10 筑摩書房。
- (43) 『一橋論叢』62—5 115—121頁 昭44・11 一橋大学一橋学会一橋論叢編集所。

- (44) 除村吉太郎訳『ベリンスキー選集』(二)所収 昭23・6 弘文堂(後に『ロシア文学評論集Ⅱ』と題して岩波文庫に収録 昭26・3)。
- (45) 『スバル』1—1 114—116頁 明42・1 昂発行所。原典は Wiener L. Anthology of Russian literature from the earliest period to the present time, vol. 2. New York-London, G. P. Putnam, 1903.
- (46) 『露西亞評論』1—8 131—157頁 大7・10。
- (47) これ以前に内田魯庵訳「露西亞文学研究の栞」(『学燈』9—12 15—17頁 明38・12 丸善), 田中純訳『露西亞文芸の主潮』(大6・2 春陽堂)といった部分訳があるが, いずれもゴンチャロフ論は含まれていない。なお大正9年訳は原書初版より, 以後の新居格訳(昭3), 伊藤整訳(昭14)等は第二版よりなされた。
- (48) 『新小説』14—5 205—209頁 明42・5。
- (49) 『帝国文学』3—12—36 62—64頁 明30・12 帝国文学会。
- (50) 『青年文化』3—2 60—64頁 昭23・3 創生社。
- (51) 『神戸外大論叢』24—2 73—91頁 昭48・7 神戸市外国語大学研究所。

Гончаров в Японии

—Обзор истории перевода и исследования

Кадзухико САВАДА

Проблематику “Гончаров в Японии” можно разделить на следующие три темы:

1. Переводы и исследования произведений писателя.
2. Творческие связи Футабатэй с Гончаровым и исследования о них.
3. Переводы глав из “Фрегата Паллада”, касающихся Японии, которые послужили источниками для изучения истории сношений между Японией и Россией.

В предлагаемой статье мы ставим своей целью раскрытие первой темы.

Первым переводчиком Гончарова на японский язык был Хасэгава Тацуносукэ, известный под псевдонимом Футабатэй Симэй. Приблизительно в 1888 году он перевел отрывок из “Сна Обломова” под заглавием “Детство” (“Ойтати”), который был опубликован в 1913 году после его смерти. В 1888 году Футабатэй еще сделал частичный перевод “Обрыва” в своей первой Книжке “Кутиба” (“Кутибасю хитокагомэ”).

Имя Гончарова было впервые упомянуто, насколько нам известно, в статье “Ограничение свободы слова и развитие литературы” (“Гэнрон но фудзю то бунгаку но хаттацу”, 1889), а в 1893 году Кувабара Кэндзо обстоятельно разобрал творчество Гончарова в своей статье “Критический обзор

новейшей русской литературы” (“Росиа сайкин бунгаку но хёрон”). Это был почти дословный перевод статьи В. В. Чуйко “Русский роман и его значение (Окончание)” (1885).

Саганоя Омуро (псевдоним Язаки Синсиро) тоже перевел отрывок из “Сна Обломова” под заглавием “Детство Обломова” (“Обуроумофу но ёдзи”) и опубликовал перевод в 1894 году. Адаптацией к японским условиям “Обыкновенной истории” и “Сна Обломова” является его роман “Жизнь обыкновенного человека” (“Цуурэйдзин но иссё”, 1897).

В 1917 году Яманоути Хосукэ впервые сделал полный перевод “Обломова”, который в то время пользовался большой популярностью и произвел сильное впечатление на японских читателей. Яманоути провел также параллель между Гончаровым и Тургеневым в “Истории русской литературы” (“Росиа бунгакуси”, 1927) и указал на огромную способность к синтезу первого в “Русской литературе. Курс лекций по мировой литературе. т. 9” (“Сэкай бунгаку коза 9. Росиа бунгаку хэн”, 1930).

Иноуэ Мицуру перевел почти все главные произведения Гончарова— “Записки о путешествии в Японию”, отрывки из “Фрегата Паллада” (“Нихон тококи”, 1941), “Литературно-критические статьи”, содержащие “Миллион тезисов”, “Заметки о личности Белинского” и “Лучше поздно, чем никогда” (“Бунгэй хёронсю”, 1948), “Обрыв” (1949–52), “Обыкновенную историю” (1952–53) и “Обломова” (1959). Вместе с тем Иноуэ в своих комментариях к переводам познакомил японских читателей с исследованием А. Г. Цейтлина “И. А. Гончаров” (1950).

Кроме этих произведений переведены также на японский язык “Превратность судьбы” (1919, пер. Нацумэ Митио), “Слуги старого века” (1925, пер. Умэда Кан) и т. п.

Переведены также несколько литературно-критических статей о Гончарове. Из них статья Н. А. Добролюбова “Что такое обломовщина?” до сих пор занимает главное место в нашей оценке писателя.

В заключение мы заметим, что проникновение Гончарова в Японию началось в конце 80-х годов прошлого века, в начале 20-го века интерес к произведениям писателя стал расти и достиг своего апогея в 10-х годах, — т. е. почти также, как это было с процессом проникновения в Японию и других писателей и произведений русской литературы. А особенность прихода Гончарова к японскому читателю мы видим в том, что на первом же этапе читатель познакомился с ним не через переводы с языков-посредников, как другие русские писатели, а главным образом через переводы с подлинников таких воспитанников Токийского института иностранных языков (Токио га-йкокуго гакко), как Футабатэй и Саганоя.